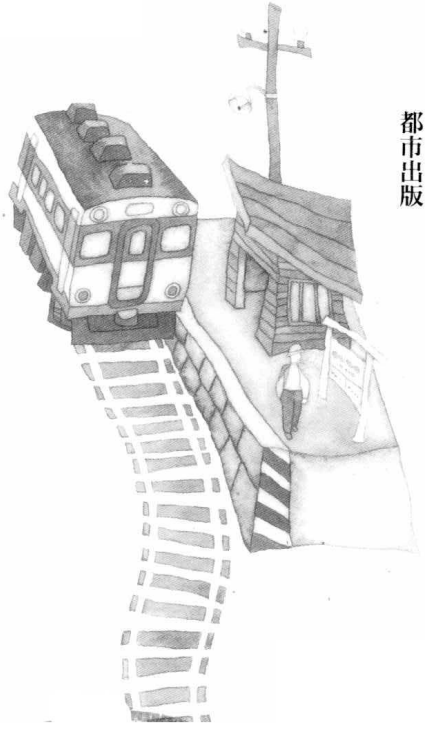
ほどよい距離の別天地

環東京十二景

高田　宏

都市出版



ほどよい距離の別天地

環東京十二景

高田　宏

都市出版

高田　宏（たかだ　ひろし）

1932年京都生まれ。石川県大聖寺町に育つ。京都大学文学部仏文科卒業。1983年まで約30年、光文社、アジア経済研究所、エッソ石油で諸雑誌を編集。1978年『言葉の海へ』で、大佛次郎賞と亀井勝一郎賞を受賞。1990年『木に会う』で読売文学賞を受賞。主な著書に『雪日本 心日本』『雪古九谷』『猪谷六合雄』『森物語』『物と心の履歴書』『子供誌』がある。

ほどよい距離の別天地—環東京十二景

一九九三年六月二十日印刷
一九九三年六月三十日発行

著　者　高田　宏
発行者　粕谷一希
発行所　都市出版株式会社
〒102東京都千代田区飯田橋二丁目九ノ三かすがビル
電話　〇三(三二三七)一七〇五
振替　東京三ノ四六六一七

印　刷　株式会社東京印書館
製　本　和田製本工業株式会社

©1993 Hirosi Takada
Printed in Japan
ISBN4-924831-05-0 C0095 P1600E

近くても旅

北海道スキーツアーのポスターをよく見かけるようになったのは、いつごろからだろうか。私など古いスキーヤーにとっては北海道で滑るというのは夢のようなことだった。日数も費用もかかる。ニセコで滑ってきたなどと聞くと羨んだものだ。

いまは朝の飛行機で羽田空港を飛び立つと午前中に北海道のスキー場で滑りだしている。パック旅行なら費用も案外かからない。東京から信州あたりのスキー場へ行くほうが、かえって時間がかかり、宿泊日数のことも考え合わせると費用もかなりのものになる。

飛行機の旅が限られた人たちの贅沢であった時代を若い人びとは知らないだろう。二、三十年前と今とでは、日本列島の交通体系はすっかり変わっている。空の交通網ができ

あがり、陸上でも新幹線や高速自動車道路がつくられて、時間距離の変型が起こった。遠いところが近くなり、近いところが遠くなった。

四国四県で合同会議を開くときには、会場を東京か大阪にすることがあるそうだ。そのほうが集まりやすい。飛行機を使えば会議に出て日帰りができる。四国のどこかで開くと、日帰りはかならずしも容易でない。

近いところが遠くなったのだ。空陸の幹線からはずれた土地ほど遠い。ビジネス旅行なら速いほど能率がいいわけだが、しかし「旅」は逆に時間をゆっくりさせるところから生まれるものだから、能率よく速く行ける土地は旅の要素を減らしてきている。

私は旭川に行くにも鹿児島に行くにも、地上を行く。空を飛べばすぐに着けると知ってはいるが、それでは私の望む旅にならないからだ。

旅は、遠いところへ出かけるから、旅であった。世田谷区の我が家から新宿の酒場に行くのを旅とは言わない。だが、今は、案外それも旅なのかも知れない。飲んで遅くなり、タクシーもつかまらず、なかなか家に帰りつかないことがある。夜空を見上げると東京の空でも星がまたたいていたり、降りしきる雨のなかで異郷にいる錯覚におちいっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たり、旅情をかきたてられることがあるものだ。新幹線で例えば仙台へ行って用事だけすませてまた新幹線で東京に帰ってくるのと、いったいどちらが旅だろうか。今は、「遠いから旅」でなく「近くても旅」の世の中だ。

『東京人』に連載してきた「東京人の○○」で出かけた土地は、東京から近いところばかりだ。○○に入るのは、熱海、軽井沢、鎌倉、伊香保、房総海岸、天城、日光、赤城山、伊豆大島、箱根、三浦半島、富士山の十二ヶ所である。このうち飛行機の行くのは伊豆大島だけだが、もちろん船で往復した。あの島へ行くのは船のほうが今も普通なのだ。夜明け前の岡田港で波浮行きのバスに乗ると、私と同じ船で島に帰ってきた人びとが、やっぱり船のほうがいいという話を交わしていた。

十二の土地のうち新幹線で行けるのは熱海だけだ。熱海行では行きは新幹線に乗り、帰りは東海道線にした。そのほかの土地は飛行機も新幹線もない。そのぶん「旅」がたくさんある土地だ。

それぞれの土地をずいぶん歩いた。バスやタクシーにも乗ったけれども、気まぐれに自分の足で歩いていたときに、やはり旅があった。

伊豆大島でも波浮港でバスを降りてから半日あまりぶらぶら歩いた。ガイドブックに載っている通りのところもあるが、しばしば思いがけない風物に出会う。海辺の小道に入って行くと、荒々しい熔岩の海岸に出たりした。観光マップには何の記載もない海岸だが、遠い昔のすさまじい噴火を幻視させる風景だった。バスに乗っていたら、この火山島の呼吸を見せているこの海岸には出会っていない。三原山も、登りはバスに乗ったが下りは歩いてみた。山腹にある温泉の露天風呂から五年前の噴火の熔岩原に蒸気が吹き出しているのが見えていた。登りのバスからは遠くちらっと見えただけの風景を、湯につかりながら間近にゆっくりと見てきた。

赤城山では火口原湖大沼（おの）の湖岸を朝のうち新雪を踏んで歩いた。ときに腰まで雪に踏み込んでしまうこともあったが、粉雪の雪面に木々の影が青く曳く美しさに息をのんだ。大沼湖畔の旅館に生まれ育った猪谷六合雄（いがやくにお）という巨人の心のありかたが少し分かるように思った。帰る日、途中まではバスに乗らないで歩いて下りた。その道でもいろいろ見たものがあるけれども、ここではそこまでは書き切れない。

房総海岸でもバスを途中で降りて、海岸で休んだ。布良（めら）への道をのんびり歩いて行か

なかったら、そして野良着の女性に出会わなかったら、青木繁がこの海辺で見ていたものを、そして、その日々が生みだした「海の幸」を、私は通りいっぺんにしか理解できなかっただろう。

天城では、湯ヶ島から湯ヶ野への峠越えの旧道を歩いた。若いときに歩いたことのある道だ。川端康成の『伊豆の踊子』の道でもある。人間にもクルマにも出会わないこういう道を歩いていると、時間感覚が二重にも三重にもなってきて、湯ヶ島に滞在していた梶井基次郎の日々が私のなかに流れ込んできたりする。

日光では湯の湖からの帰り道を歩いた。明治のはじめのモースやブスケの旅が私のなかに流れ、田山花袋や国木田独歩の若い日々が身近く感じられてくる。

軽井沢を自転車で走った。箱根の雨に濡れて歩いた。伊香保の石段道を上り下りした。鎌倉の砂浜を歩いた。三崎から油壺への海沿いの道も歩いた。

どの土地にも「旅」はたっぷりとあった。一泊二日を超える旅はないのだが、十二の土地に十二の旅があった。もう一度言えば、「近くても旅」なのだ。そして、旅先では自分の足で歩くほどに、「旅」が濃くなってくる。何も長い距離を歩かなくても、急がずぶ

らぶら歩いていると見えてくるものがある。歩けば道に迷うことがある。その不安も「旅」を色上げするものだ。

目

次

近くても旅
ほどよい距離の別天地——東京人の熱海　7
別荘の意味——東京人の軽井沢　33
「鎌倉文士」の戦前・戦後——東京人の鎌倉　59
学者文人への親しみ——東京人の伊香保　87
太古の海が呼びかけてくる——東京人の房総海岸　115
二〇年代の青年たち——東京人の天城　143

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

聖なる山々の自然と人と——東京人の日光　169
白樺派の「ふるさと」——東京人の赤城山　195
浄化する火の下に——東京人の伊豆大島　223
湯治から遊山へ——東京人の箱根　251
近代化の歳月が見えてくる——東京人の三浦半島　277
大いなる山への畏敬——東京人の富士山　303
あとがき

装丁・熊谷博人
装画・高田雄太

ほどよい距離の別天地

――環東京十二景――

〔東京人の熱海〕

ほどよい距離の別天地

1

もう三十年以上昔のこと、勤めていた出版社の春の社員旅行で熱海へ出かけた。週末の一泊二日、六十人ばかりの男女社員が羽目をはずす恒例の社員旅行の行先がどこになるか、いつも期待と関心があつまったものだったが、その春は幹事の一人にさせられた私がいささか頑固に熱海を主張したのだった。

社員旅行というのは俗悪なものである。したがって俗悪な場所がふさわしい。すなわち熱海が最適である。というのが私の理屈だった。

「熱海じゃなあ、みんながっかりするぜ。もうちょっと気の利いたところにしないと、

幹事は何をやってるのかって言われる。企画力がないってバカにされるぜ」

先輩幹事のその懸念を押し切って、行先は熱海と、強引に決めてしまった。

旅行予定を張り出すと先輩幹事の言う通り不平と嘲笑の声があがったが、旅行当日は電車のなかからウイスキー、日本酒、ビールにおつまみとサービスにこれつとめ、夜の宴会では貫一お宮の熱海の海岸の場面まで演じてみせた。

衣裳小道具は旅館に備えてあった。浴衣の上に黒マントを羽織り白線入りの学生帽をかぶって高下駄を履いた貫一役の私が、紙製のかつらをかぶった女浴衣姿の先輩幹事扮するお宮を足蹴(あしげ)にする。ボール紙の月を指して、うろおぼえの科白をやると、みんな笑いころげた。

「宮さん、来年の今月今夜のあの月を、ぼくの涙できっと曇らせてみせる。いや、再来年の今月今夜、十年後の今月今夜のあの月もぼくの涙で……」

サービスついでに、百年後の今月今夜のあの月も、千年後の今月今夜のあの月も、とやったものだ。

宴会のあとはそれぞれ町へ繰り出していった。糸川べりのあやしげな店へ行った連中

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com